



筑波サーキットで初開催となる 全日本ST1000クラス

21台という貴重な決勝グリッドを賭けた争奪戦が今始まる!!

“ST1000セミファイナル サバイバル・クオリファイ”
計時予選でベストタイム上位16台がまずは決勝進出。その後 予選総合17位以下のライダーによるセミファイナルレースの上位5台が決勝進出となり、21台の決勝グリッドが決定する。セミファイナルレースは土曜日に開催。そして21台による決勝レースはレース1、レース2共に日曜日に開催される。筑波サーキットで初開催となる全日本ST1000、大混戦必至のレースは土曜日から目が離せない!



クラス紹介



2020年より新設されたクラス。筑波サーキットで行われる全日本選手権では今年初開催となる。JSB1000クラスと同様に最新のリッタースーパースポーツバイクによって争われるが、改造範囲が狭く、よりスタンダード（市販状態）に近いクラスとなっている。ダンロップタイヤのワンメイクとなっており、アジアロードレース選手権（ARRC）のASB1000クラスと似た規則となっており、ST600同様に交流が盛んになりそう。



レギュレーションで、改造範囲が細かく制限されており、マシンレベルでの差はそれほど多く感じられない状況となっており、ベテランから若手まで実力ぞろいのライダーが毎戦レベルの高いレースを繰り広げている。アジアロードレース選手権（ARRC）SS600クラスとレギュレーションが近く、ここ数年は交流が進んでいる。2015年よりブリヂストンタイヤのワンメイクとなり、よりローコスト、イコールコンディションで争われるクラスとなっている。



サーキット専用で造られた4ストローク250cc単気筒のレーサーで争われているJ-GP3クラス。MotoGPロードレース世界選手権Moto3クラスに直結しており、若手ライダーは、世界を目指し、ベテランライダーは、その壁になるべく同じ土俵で戦っている。トップスピードこそ大排気量クラスのマシンには劣るが、コーナリングスピードでは、それをしのぐ速さを見せるのが特徴。高いコーナリングスピードをいかに維持しながらコーナーを曲がるかという、小排気量ならではのテクニックが要求されるクラスだ。



国内のみならずアジア全体で盛り上がりを見せている4ストローク250ccスーパースポーツクラス。ロードレースの底辺拡大並びに新規参入者の増加を図る重要なカテゴリーとしてスタートした。



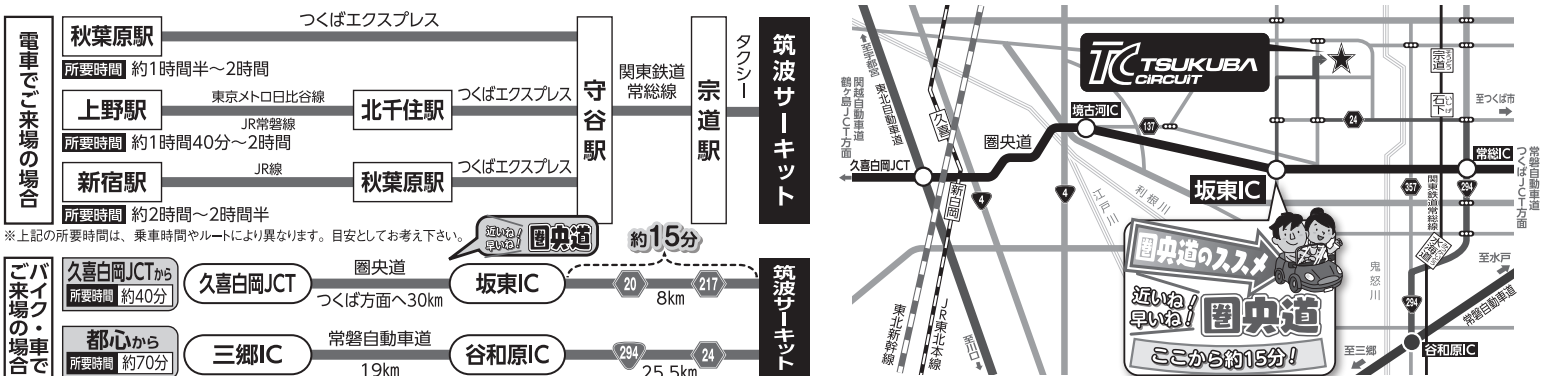
全日本選手権のピラミッドの底辺を支える重要なクラスとして「MFJカップ」の名のもとに行われる。キッズライダーがミニバイクを卒業し、このJP250にステップアップする姿が見られる。車両価格が安く、パワーが低くミニバイクからの乗り換えが容易なことなどメリットは数多くある。

※「MFJ SUPERBIKE official Fan-Site」、「MFJ CUP JP250 Official Fan Site」より文章抜粋

チケット情報、イベント情報は筑波サーキットホームページをチェック!!



ACCESS 都心から70分!! 圏央道開通で楽々アクセス



※上記の所要時間は、乗車時間やルートにより異なります。目安としてお考え下さい。